
この恋、届け。～私は兄に恋をした～

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この恋、届け。〜私は兄に恋をした〜

【Nコード】

N4564B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

蒼・翠・桃は三つ子。けど桃は実兄の蒼に恋をした。叶わないと知っていても、どうかこの気持ちだけは伝えたい。「俺も桃みたいな妹いて幸せだよ」思いは簡単には消えないけれど、それでも良い。側にいたい。妹が兄に恋をした、切ない恋愛物語。

よくみんな言う。

自分は叶わない恋をしている、と。

けどそれは違う。

だって、もし好きな人に恋人がいてももしかしたら別れるかもしれないから可能性はゼロじゃない。

同性愛だってありうること。

遠く離れてるところにいるからって、思いが通じないわけじゃない。

要はどれも叶わないんじゃない、可能性が低いっていうだけ。

それをみんな悲観ぶって「自分の恋は叶わないんだ」って思い込んでいる。

あたしにしてみたらそんなの、ただ伝える勇気がないだけなのに。伝えられるのに伝えないのは、この上なくバカだよ。

だって、じゃああたしはどうしたら良いの？

100%叶うことないっていうのは、きっとあたしのことを言う。

「桃、待った？」

「遅いよお蒼兄。翠姉は？」

「委員会あるから先帰ってろって」

長男、あお蒼

長女、みどり翠

次女、もも桃

3人は三つ子です。

「そうなんだ。ん？翠姉って委員会入ってたっけ？」

「さあ？」

「まあいっか。じゃあ帰ろー！」

高1のあたしたち。

運動神経抜群な蒼兄、成績優秀な翠姉、そして芸術系得意のあたし。3人そろってたら完璧だったって周りは言うけど、あたしたちはそうは思わない。

もしそろってしまったらあたしたちは三つ子として生まれてないってことになるから。

帰ろうとした、そのときに蒼兄が言った。

「桃、ちょっと良い？紹介したい人いるんだ」

「え？」

そう言って現れたのは、同じクラスの香月だった。

香月は照れくさそうに蒼兄の隣に並んだ。

そしてよく見れば、2人の手はしっかりと結ばれている。嫌な予感がした。

「今日から付き合うことになったんだ。桃と同じクラスなんだろう？香月」

「う・・・ん」

「思い切って告白したらOKされたんだ！よろしくね、桃」

うれしそうに言う香月。

香月の笑顔が許せないでいる自分がいる。

あたしの心の闇が、いっきに広がった。

気づけばあたしは蒼兄にひどいことを言ってしまった。

「・・・告白されたなら誰でも良いんだ？」

「え？」

「こんなのってあんまりだよ・・・！」

そう言って、あたしは走って帰った。

蒼兄にもいつか好きな人ができて恋人ができるのも当たり前だ。

だけどいざそのときがくると、やっぱり耐えられない。

どうしてその隣にいるのがあたしじゃないんだろって、どうして

あたしはだめなんだろって、そんなことばかり思ってしまうんだ。

あたしはずっと蒼兄が好きだった。

ずっと、ずっと。

だけど報われることがないって分かってたから、ずっと心の奥に閉ざしていたんだ。

あたしと蒼兄は兄妹だから、思いが叶うってことは絶対に有り得ない。

だから我慢してた。

みんなが彼氏つくってラブラブしてるのを見てうらやましく思っても、絶対にこの気持ちだけは人に知られてはならないと、断固としてこの口から伝えようとはしなかった。

だから認めたくない。

あたしの方がずっとずっと蒼兄のこと好きなのに、突然横から出てきた人にとられるなんて絶対に嫌だよ。

・・・本当は素直に受け入れて、応援しなきゃだめなんだって分かっている。

それが妹としての役割だって分かっている。

けれど、片思いをしてる相手の恋を見守るなんて・・・辛いよ。

あたしは妹で、この恋が実ることは絶対にないけれど、でもそれで

も諦めたりはしないと誓った。

諦めなかったらどうにかなるとかそういうことじゃなくて、妹だからって理由で無理やり蒼兄を好きになくなるってのは良くない思っ
った。

というより、無理なんだ。

好きだったものを突然嫌いになんかなれるはずがない。

ずっとずっと思い続けてきたこの16年分の思いは、そう簡単には消えてくれない。

「あれ・・・上手いかない」

芸術系が得意なあたし。

美術や書道、いろいろあるけどその中でも特に得意なのが音楽。

音楽の中でもとりわけピアノが得意で、音楽コンクールとかではいつも伴奏者になってる。

小さい頃からずっと習ってて、将来ピアニストとかピアノの先生になれたら良いなって思ってる。

そんなあたしが、簡単な『エリーゼのために』にすら満足に弾けない。

「変だな・・・」

練習曲でしか過ぎないのに、どうしてこんなにも手が動かないの。どうしてこんなに指が震えているの。

『桃はほんとピアノ上手いよなあ。俺なんかそっち系全然だめだ』

『蒼兄運動熱血単純バカだもんね』

『あつそこまで言うか?!』

『冗談だよー』

懐かしい記憶。

昔からあたしは蒼兄にひつついて離れなかった。

生まれたときから一緒。

なにをするにも一緒だった。

翠姉も含めて、普通の兄妹以上に仲の良い三つ子だった。

『あたしそんな蒼兄好きだよ』

あの頃言った言葉。

あの頃はまだ蒼兄のことを異性として本気で好きだとは思っていなかった。

『俺も桃みたいな妹いて幸せだよ』

『でしょっ』

だから妹として見られてなくても全然なんとも思わなかった。

だって、普通ならそれが当たり前だから。

つまりあたしは普通じゃなくて、異常なんだ。

・・・だけど、異常者って言われても仕方がないくらい、どうしようもないくらい好きなの。

いつも蒼兄を見てた。

好きだと自覚した中学生の頃からずっと。

『桃は好きな人いないの?』

『好きな人ー? うーん、いないなあ。てか人を好きになったことってないかも』

『えー?! 初恋もまだなんだあ! あーでもいつも隣にあんなにカッコ良い蒼くんがいるもんね。蒼くん以上の男じゃなきゃだめってわけか』

『だめっていうか蒼兄が隣にいるから別に良いかなって』

『このブラコンめー!』

『えへwそれに好きってどういうのかよく分からないんだよね』

男の子にも告白されたことあったし、決して機会がなかったわけではなかった。

それでも付き合いたいと思ったことはなかった。

隣に蒼兄がいてくれるから。

『そんなの簡単だよ。目を閉じて瞳の中に写った人が好きな人なのよ』

『瞳?』

友達にそう言われ、あたしは思わず目を閉じる。

ゆっくり深呼吸してみると、頭に思い浮かんだのは蒼兄だった。

『蒼・・・兄?』

別に他の男の子と全然接しないわけじゃない。

友達だっているし、蒼兄には劣るけどそのくらい仲が良い人だっている。

けど、思い浮かんだのはその人たちじゃなく、実の兄・蒼だった。その頃からあたしは蒼兄を好きなんだと自覚し始めた。

蒼兄にも今まで好きになった人はいなかった。

だから余計にあたしはうぬぼれてたのかもしれない。

妹だからってずっと一緒にいられるってわけじゃないのに・・・

『今日から付き合うことになったんだ。桃と同じクラスなんだろう？
香月』

・・・どうして鍵盤の上に涙が落ちるの。

ポト・・・ポト、ポト。

大粒の涙が落ちる。

鍵盤に落ちた涙は吸収されることなく、濡れてしまう。

あたしはその鍵盤を思い切りバーーン！！とたたいた。

はあはあと息がきれるとともに、こんな自分がもどかしく感じた。
そのとき、部屋がノックされた。

「桃」

「あ・・・翠姉」

「えっ、泣いてるの？どうしたのよ、桃っ」

翠姉が急いであたしのもとに駆け寄った。

あたしも急いで涙を拭く。

なんでもないよと笑って言ったけど、それでもやっぱり顔に出てしまっ
うんだ。

失恋という名の悲しみが。

翠姉はあたしのベッドの上に座る。

そしてゆっくり言った。

「・・・蒼がね、心配してたの。いつもの桃と違うって」

「うん・・・」

「桃、蒼が好きなのね？」

あたしは翠姉の顔を見た。

そして、ピアノの椅子から立ち上がって、ベッドの上にいる翠姉に抱きついた。

「お姉ちゃん、あたしどうしたら良いのっ・・・・・・・・」

ぎゅっと強く抱きしめる。

そしてまたポロポロと涙。

いつの間にこんなに涙腺がもろくなってしまったんだろう。

蒼兄のことを考えると、悲しみでいっぱいだ。

でも決して蒼兄が悪いわけじゃないんだよ。

あたしが勝手に好きになって、勝手に悲しんでるだけ。

あたしのただの1人よがり。

だけど、勝手ながらもこんなに悲しい気持ちになるのは生まれてはじめてだよ・・・

「ねえ桃。兄妹って絶対に結ばれることってないよね」

少しだけ、翠姉の声が震えてるように感じた。

翠姉は続けて言う。

「でも・・・伝えることはできるじゃない？」

100%叶わない恋。

報われることがないって分かってる恋。

「あたしの好きな人はね、夏に九州に転校していったの。何回か手

紙のやりとりもしたわ。もちろん、メールも」

あたしを抱きしめる翠姉の手がカタカタと震えている。ちらっと横目で翠姉の顔を見ると、目が潤んでいる。

「けど・・・今日知らせがあつたわ。彼のお母さんから彼の携帯から電話で・・・彼、学校から家に帰る途中で車にはねられたの」

あたしは思わず「えっ」と声に出してしまった。けど翠姉はあたしに構わず続ける。

「彼・・・最後の最後にお母さんにこう言ったんだって。『翠・・・稲場翠に伝えてくれ。転校してからずっと連絡取り合ってたけど、会えなかったけど・・・好きだったって』」

「お姉・・・」
「自分で伝えることができないのが悔しいって・・・、そう言ったのよ」

ああ、今日委員会って言ってたのはそのことがあつたからなんだ。翠姉は委員会には入ってない。だから不思議に思った。

「あたしまだ伝えてないの。彼に好きだって、伝えてないの・・・」

確かにあたしの恋は100%叶わない。けれど、伝えることはできるんだ。すぐそこにいてくれる限り、たとえ報われないと分かっているでも口で気持ちを言うことは可能なんだ。

生きていてくれる限りは。

「翠姉……」

「だから、桃にはあたしみたいな後悔はしてほしくない……伝えて振られたとき悲しみでいっぱいになるかもしれないけど、ずっとずっと好きでいることの方が悲しいこともあると思うのよ」

いつもお姉ちゃんはあたしのことばかり。

本当は自分の方が辛いくせに、いつだってあたしやお兄ちゃんのとばかりに気を使う。

そんなところが大好きなの。

なのにあたしはそんな翠姉を助けてあげられない。

なんて声をかけたら良いのかも分からない。

ただただ、ぎゅっと抱きしめてるしかできないんだ。

自分は無能なんだって知って、すごく悔しい。

「お姉ちゃん……あたし、伝えるよ。お姉ちゃん分まで一緒に」

「桃……」

「だからお姉ちゃん、あたしが振られたあとは一緒にまた泣いてね」

あたしは部屋を出る。

ゆっくりと廊下を歩いて、隣の隣の蒼兄の部屋へ向かう。

部屋のドアの前に立って、深呼吸をしてノックをする。

「……お兄ちゃん、いる？」

2回コンコンとたたく。

「どーぞ」

蒼兄の声がしたから、ドアを開けて部屋に入った。

蒼兄はベッドに寝転んで漫画を読んでいた。

あたしが入るなり起き上がって声をかける。

「どうした？桃」

さっきのことを気にせんとばかり、蒼兄は微笑んで言う。

あたしにはそれが余計に悲しく思えて、嬉しくも思えてしまう。

「・・・蒼兄、あたし・・・っ・・・」

気持ちが焦って言葉にできない。

そんなあたしに、蒼兄は立ち上がってあたしの頭に手をポンと置く。

「なんか今日様子変だったもんな。なんかあったんだろ？言ってみ。聞いてやるから」

その蒼兄の優しさがあたしの心を癒すとともに、あたしの蒼兄への
思いを縛るの。

全身から気持ちが溢れる。

好きという思い。

「・・・今日蒼兄が香月と付き合ってたとき、すごくシ
ョックだった」

「うん」

「蒼兄が・・・他の誰かのものになっちゃうのが悔しくてたまらな
くて・・・」

口をかみしめる。

今までの我慢を振り切って、言い放つ。

「お兄ちゃんが・・・好きだからっ・・・!!」

叶わなくとも、報われなくても伝えたい。
どうかあたしの気持ち、あなたに届け。

「うん」

蒼兄は2回うんと言って、あたしを抱きしめる。

「うん。ありがとう。ありがとうな、桃」

蒼兄は決してごめんとは言わなかった。

ありがとうと、優しい声で何度も言った。

その優しさに惹かれて、傷つき、そしてまた救われる。

「蒼兄い・・・っ」

「俺も桃が好きだよ。けど妹として。それはこれからも変わらない。
桃は大事な妹だから」

鍵盤の上で流した涙よりもっとたくさんの涙が一度に流れ出る。
そしてまたあたしの頭をなでるんだ。

タンスからタオルを取り出して、あたしに渡す。

あたしはそのタオルを握り締めた。

震える声で蒼兄におそろおそろたずねる。

「蒼兄・・・あたしこれから側にも良い・・・?」

1人の女の子として見てもらえなくても、それでもずっと側にいた

いって思うこの気持ちに偽りはない。

たとえば彼女ができて、妹としてでも良いからって思えるのは、それほどあたしが蒼兄を好きだったって証拠になるから。

いつこの気持ちがなくなるのかとかは分からないけど、でも良い妹になりたい。

今度は妹として蒼兄のことを好きでいたい。

「当たり前だろ。言っただろ？ 桃みたいな妹がいて幸せだって」

「覚えて・・・んだ」

「忘れるわけないよ」

今は記憶の一部にあるその言葉。

その言葉だけがあたしの励みだっただなんて夢にも思わないんだろうね。

「だって俺ら兄妹だろ？」

あたしは蒼兄に渡されたタオルで涙を拭く。

蒼兄の言葉のせいで余計に泣けてしまって、乾くのに時間がかかった。

でも蒼兄はあたしの隣であたしが泣き止むのをずっと待ってくれていた。

たくさん挫折して、その次はきっと笑えると思う。

今回はだめだったけど、今度いつか好きになる人ができたときには実るように頑張りたい。

伝わらない思いはない。

そう教えてくれた翠姉に、心から感謝したい。

夕飯時になったから、あたしと蒼兄は部屋を出る。

1階のリビングへ行くと翠姉が夕飯の手伝いをしていた。
あたしは翠姉を見てニコツと笑って右手でピースした。
翠姉は嬉しそうに頷いた。

「なにコソコソしてんの？」

「ひっみつー！」

この世の中で伝わらない思いってないんだって。

もし片思いでも、叶わないと知っていても、どうか気持ちだけは伝えようよ。

伝えたらきつといつか良い思い出になるはずだから。

伝えられるうちに伝えなきゃいけないんだって初めて知った。

伝えなきゃ叶うものも叶わない。

あたしは蒼兄に恋をした。

けれど、今度は伝えたとき笑顔になれるような恋をしようと思う。

一歩前へ進むことができて本当に良かった。

だから、あたしに勇気をくれた翠姉と優しさをくれた蒼兄に言いたい。

心を込めて、ありがとう。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4564b/>

この恋、届け。～私は兄に恋をした～

2010年11月4日01時38分発行